

デジタル世代に和本のアナログ文化を伝える

小林 一彦（京都産業大学・教授）

はじめに

私は、京都産業大学で日本の古典を教えています。国文学の専任教員は私一人なので、大学のホームページでは、専門は「日本古典文学」となっていると思います。「古典」とは何か、「国文学」とはどう違うのか、ずっと気になっていました。

あちこちから呼ばれて、講演にでかけます。いろいろな学校にも出前授業に行くことがありまして、一番若かった聴衆には、4歳の子がいました。「百人一首の講演会」だったのですが、丹後の教育委員会から「小学生・中学生を対象とした『百人一首』の講演会をやってください」ということで丹後まで行きました。

「国文学」と「古典」と、言葉が別個にあるわけですから、たぶん違うのだろうと思うのです。まったく同じものなら、まあ言葉は一つでいいわけですから。国文学を研究すると、古典ですね、古典をどう教えるのかというのは、また違う問題だろうと思うのです。

デジタル時代の古典文学

生命科学の分野で、日本人のDNAとかゲノムとか、それから細胞とか肉体というのは今盛んに研究対象になってるのですが、恐らく、私たちが勉強し、私たちが関心を持ち、私たちが小学生や中学生の次世代に伝えなければいけないものは、これだと思うのです。日本人のDNAやゲノムというのは一体何なのか、あるいは「心の細胞」というのは何でできてるのか。それは決して、デオキシリボ核酸（DNA）の4つの塩基の並び方とか、二重らせんの構造とか、そういう分析ではなく、人文科学の分野では、日本人は何を心の遺伝情報として原始以来、今に至るまで大事に伝えてきたのか、ということになるだろうと思います。これがたぶん、古典というものの本質と深く関わると思います。肉体というのは、肉体は減んでもDNAとかゲノムというのはちゃんと維持されていくんだと。遺伝子というものを乗り物にして、肉体が減ぼうとも複製されてうまく乗り移るようにして生き残ってきてるんだということらしいのです。命を持った個体は減んでも、そう遺伝情報は写されて地上に残る、未来へと伝えられていく。

古典というものもこれに非常に近いだろうと思うのです。古典籍あるいは本というのは、肉体にあたる乗り物なわけです。古典籍というものを考えるときに、そこに本質的な情報をどう乗せるか、あるいは見方を換えれば、ある特定の古典籍には、どのような種類の情報を載せやすいのか、というのが、問題だろうと思います。それぞれの気候や環境によって、土地土地で生息している動物植物が違うように、それぞれの気候風土に適合して、古

典籍も生きてきたわけです。

ついこの間、この場にいらっしゃる入口敦志先生がコメントされ、ディスカッションされた非常に面白いシンポジウムが、明星大学でありました（注：日本文化学科 国際シンポジウム「世界の写本、日本の写本」2017年1月9日）。勝俣基さんがプロデューサーです。先週、これに行ってきました。海外からも複数の研究者・図書館司書が集い、さまざまな視点から本のことが語られました。多岐にわたり、まとまらないシンポジウムでしたが、むしろそれが面白かった。

やっぱり、結局はバベルの塔、なんだなという感じがしたのです。唐突で何のことか、さっぱり意味がわからないのでしょうか。言語が違うように、それぞれがそれぞれの国の、あるいは民族の、あるいは風土の、地域の、どういう“肉体”を選ぶか。日本は紙を選んだわけですが、石・石版を選ぶ場合もありますし、あるいはパピルスみたいなものを選ぶ場合もあるだろうと思います。そこに記録されているゲノムというものが、それぞれの民族やそれぞれの部族、あるいはそれぞれの人たちが、古代から伝えてきているものをどう伝えていこうか、という格闘の歴史そのものなんだろうと思うのです。それがあらためて確かめられたので、私にとっては有益な、素晴らしいシンポジウムが、「世界の写本、日本の写本」というシンポジウムでした。

デジタル時代になって、国文学研究資料館も古典籍を大々的にデジタル化して世界に公開しようということされています。古典籍研究センターというのがあって。私も多少の義理があり、第1回日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」のうち、パネル2「総合書物学への挑戦」にディスカッサントとして登壇したりしました。そのほか、最初の、京都でやったアイデアソンなどのイベントにも参加しました。国文学の関係者は私だけで、異分野の方ばかりの集まりでした。「このデジタル画像を使って何ができるか」ということを自由に話し合う場です。ああ、こういう時代がもうやってきたんだなということを如実に感じました。

『源氏物語』の例を出しましょう。最近、大島本を相対化する研究や、新発見の古写本も影印紹介されてきています。私たちの学生時代は、池田亀鑑の『源氏物語大成』が、まず頼りにするテキストでした。『源氏物語』のテキストを博搜し、おびただしい伝本を校勘して『源氏物語大成』という「テキスト一覧」を作ったわけです。そうした作業の過程で、乱暴な言い方をすれば、おそらくこのようなものが『源氏物語』の青表紙本として存在するはずだ、という理想のテキスト幻想が池田亀鑑の中にイメージとしてはできあがってきていた、そこで巡り合ったのがたまたま大島本だったということらしいのです。大島本というのは様々な書き込み、あるいは墨消しがあり、本もだいぶ改変されてるのですが、墨消しされたり傍記だったりというものを池田亀鑑が読んでいくと、これこそ定家が恐らく書写した青表紙本のテキストなんだろうというのが見えてきてしまったのではないかと、そこから大島本が『源氏物語』のテキストとして大変な権威を持ってきたらしい、というようなことらしいのです。

今われわれが読む『源氏物語』は、ほとんどが青表紙本のテキストなのですが、その中でも特に大島本です。重要文化財になっています。もっと古い写本はいくつもあるのですが、やはり大島本に勝る『源氏物語』の青表紙本のテキストはないということを、池田亀鑑はさまざまなテキストを、文献批判し、比較校勘することによって、察知したのだろう

と思います。

入口先生が「世界の写本、日本の写本」で発言された内容は、長い時間をかけてきた、研究者の手で進められてきたテキストの標準化が、もう一回スタートラインに立つ、あるいは振り出しに戻る、古典文学のテキスト校勘の歴史が、ある意味リセットされる、ということだと思いました。オープンサイエンスとかシチズンサイエンスの時代、文科省が今、盛んに提唱し、推し進めている二本柱ですけれども、市民の誰でもが研究に参加できる、そのためには専門家しか手に取ることができなかった情報をデータとして公開し、すべてオープンにする。そうなってくると、いわゆる価値の激変が起こるわけですよね。今まで古典研究者が、このテキストが最も優れている、としてきた成果を受け入れることで、後から進む者は研究をはじめたわけですが、これからは誰でもパソコンを開けば、画面上に画像データとしていくつものテキストを呼び出せて、それを次々と比較校勘することで、いわば誰でもが池田亀鑑になれるわけです。

加えて今では、くずし字も人工知能が読んでくれる時代になりました。必要は発明の母、という名言がありますが、阪神大震災や東日本大震災を経て、防災の観点から、自然科学の研究者が過去の災害の記録から学ぼうとする気運が高まりました。けれども、そういった分野の研究者は、独特のくずし字で書かれた古文書などは読めない、ではどうすればよいか、というパソコンで解読するシステムを作ればいい、というわけです。昨年、うちの研究所（注：京都産業大学日本文化研究所）の主催で、はこだて未来大学——将棋の電脳戦、IT、人工知能で将棋がどれだけ強いとか、それから、小説をコンピューターに書かせるとか、さまざま先端的な挑戦をされている大学ですが、その函館から寺沢憲吾先生に来ていただいて、「くずし字がすらすら読めるーデジタルアーカイブと人工知能で変わる人文学の世界ー」という講演会（2016年11月18日、京都産業大学図書館ホール）を開きました。AI、人工知能が古文書をすらすら読む——「すらすら」という段階まではまだちょっと、と寺沢先生は言っていましたが、その時、お話しいただいたのは、人工知能は読んでいるわけではなく、字の形、つまり黒白濃淡のライン、曲がり具合や止め具合、「はらい」や「はね」をなぞって認識し、文書の中から似たものを拾い出してくるという方法です。データと照合して、たとえば「地震」というくずし字、草体は活字に慣れた現代人には読めませんが、黒のラインの曲がり具合などをパターン認識して膨大なデータから似ているものを拾い出してくる。「地震」の記事なら、そこだけ読めばよい、ということになります。古典籍調査に出かける時にはハンディなものがよく、けれども用例数でいうとたくさんの字母種と字形をあげてくれている大部なものが必要な場合もありますから、矛盾するのですが、今、ここ国文学研究資料館の「日本古典籍くずし字データセット」などは、68万文字くらい、データとしてくずし字がアップされているわけです。スマホさえあれば簡単にアクセスできる。そうした形とつきあわせる作業を人工知能がやってくれれば、「この字は何て読むんだらう？」という時代ではなくて、もう明日にでも、人工知能がどんどん古文書を読み進めてくれる時代が来るだろうと思います。

腕時計やメモ帳と同じような感覚で、日用品としてのスマホをふつうに使っている世代に、データをアプリで使いこなすことが日常の世代に、千年前の古典をどう教えるか、いろいろな問題があると思うのです。何度も言っていますが、乗り物としての個体・生命体としての書物と、伝えられている内容、あるいはそこに乗せられている命・魂と言い換え

てもよいのですが、日本の古典教育の場合には、どうしてもこの二つが、デジタル世代では希薄になっている。生命体としての書物は、もはや掌に収まる冷やかな長方形の薄っぺらい金属のかたまりで、魂であるテキストは液晶画面の点滅でしかなく、それも、もとをただせば「0」と「1」との数字の組み合わせにしかすぎません。膨大なデータ、情報の宇宙をワープしながら浮遊している若い世代に対して、われわれは何をどう伝えるか、ということになります。

その時にやはり前提になるのは、一つは古典とは何か。それからもう一つは、その古典の DNA・遺伝子としての乗り物であった肉体、古典籍、特に国語教育の場合ですと、和本はどう変わってきたのか、また変わらないのか、ということなのです。

古典とは何か

唐突ですが、エスペラント語の事例を考えてみたいと思います。エスペラント語はなぜ広がらないのでしょうか。絶滅危惧種と言ってもよいエスペラント語ですが、もとはと言えば、魔法の言語、夢の言語、人類の希望のことばでした。世界共通語を作ろうとした。いわゆるバベルの塔の以前に戻そうとしたわけです。そうすれば戦争もなくなるだろうと。理想は素晴らしかったのです。私の若いころは、実際にエスペラント語を習ってる人もたくさんいました。今、学生に訊くと「えすぺらんとご？ って何」というレベルなのですね。人類の希望、未来の言語は、なぜ広まらなかったのだろうか。それからこれと対極といってもよい、誰も使っていない過去の言語として、ラテン語があります。ラテン語をいまだに学んでいる人がいるのはなぜなのだろうか、ということを見ると、それはやはり、人類の DNA やゲノムと非常に密接に関わってきていて、エスペラント語は古典を持っていないのです。エスペラント語というのは意思の疎通とか、あるいは経済取引とか、「今日は寒いですね」とか「私はこれが食べたいのです」と言う時の言語であって、エスペラント語の最大の弱点は古典を持っていないことなのです。ギリシャやローマに遡るヨーロッパ文明、また文化を伝えるもの、いわば西洋文化の DNA を深く知りたい、捕まえたい、と思った時に、ラテン語は必要なのです。つまり、古典というものが言語を学ぶきっかけとして、あるいは“にんじん”のような働きをしているわけです。

今、文学部でフランス文学・ドイツ文学などは人気がないのだそうです。私どもは英米文学科とか英文科、あるいは仏文科、独文科で、昔は英語を習ったり、ドイツ語を習ったりしました。何のために英語を習うのかというと、古典を読むためなのです。その国の言語で書かれた文献を読解するためです。知識や思想、文化を学ぶためです。シェイクスピアを読むためとか、あるいはゲーテ、アポリネールの詩、アンドレ・ジイドを読むためとか。『パンセ』や『国富論』を読むためとか。それが今、無くなってきている時代に、英語が、コミュニケーション・ツールとしての英会話が小学校の課程に入ってくる時代に、私ども古典を勉強・研究している者は、次の世代にどう古典を教えていったらいいのだろう。そのような問題が、私ども古典を研究している者一人一人に問われている状況が、今きているんだろうと思うのですよ。

少なくとも、私どもは古典を読み、文学作品を解釈・研究し、あるいは書誌学的な、図書学的なその“乗り物”についてもしっかりと押さえたうえで、“DNA”の解析をして、

次の世代にそれを伝えていかなければいけないんじゃないだろうか。それが私どもの使命じゃないだろうかということ、遅ればせながら京都に行って考えるようになったのです。

「文学とは何か」となると、これはとても難しい問題です。「文字で書かれたものは少なくとも文学と見よう、文学として扱おう」という立場にたてば、古文書も当然、文学になってくるだろうと思うのです。『風土記』などは、もちろんそうでしょう。学生時代に酒席で上代の先生から、『風土記』とは「どこでどういう産物がとれる」とか、「どこからどれほど歩いて行くと何山に着く」という本ではないのだ、君に『風土記』の優しさがわかるか、あれは立派な文学なんだ、ということと言われたことがありました。それからさらに問題となるのは、「文字で書かれたもの以外にも文学は存在する」という立場があるわけです。つまり、伝承文学や口承文芸、口碑とよばれるものです。そういう中で、それではわれわれは「古典」というものをどう子どもたちに教えていけばいいだろうか、ということなのです。

それでもう一つの大きな問題は、「古典」そのものです。スライドを見てください。これは法律の条文です。古典の日の制定の条令なのですが、その第一条と第二条なのです。法律の条文というのは必ず一文でないといけならしくて、このように長いんだそうです。

この法律は、古典が、我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、古典の日を設けること等により、様々な場において、国民が古典に親しむことを促し、その心のよりどころとして古典を広く根づかせ、もって心豊かな国民生活及び文化的で活力ある社会の実現に寄与することを目的とする。

(古典の日に関する法律第一条)

これはよくできていると思います。少なくとも古典を研究する者が、どこか頭や心の片隅に置いて、自分は何のために古典を研究し、発信をし、社会貢献をし、次の世代に伝えて命をまっとうするかということ考えた時、常にたち帰らなければならない条文だろうと思うのです。それから第二条は、

この法律において「古典」とは、文学、音楽、美術、演劇、伝統芸能、演芸、生活文化その他の文化芸術、学術又は思想の分野における古来の文化的所産であって、我が国において創造され、又は継承され、国民に多くの恵沢をもたらすものとして、優れた価値を有すると認められるに至ったものをいう。

(古典の日に関する法律第二条)

これが「古典」だということですね。ということは、少なくともわれわれが研究しているものの中には、あるいは学会での全国大会の口頭発表の中には、これに該当しないものを研究対象としている事例が含まれるんじゃないだろうかということは、常に学会全体としても検証していかなければいけない問題だろうと思います。もちろん、古典などどうでもいいのだ、研究対象としては私はこれが一番面白い、だから研究する、学会費を平等に収めているのだから、発表の権利がある、という主張は当然あってよいのですが。

先ほど DNA の話をしましたけれども、第二条の条文は、古典というよりも日本人の DNA

がこれにあたるものでしょう。その遺伝子が生命体、古典籍あるいは人体による口伝えも含めて、うまく乗り換えながら進化ないしは複製されて伝えられてきているわけです。恐竜は絶滅してしまいましたが、人体も命に限りがあります。けれども、日本人の DNA の乗り物としての古典籍は、1200 年を経て、しかもおどろくべき固体種の数で、まだ生き続けている。だからわれわれは古典籍を通じて、DNA を抽出する、分析する、ここまですでにできないと本当は古典の研究にはならないだろうという気がするのです。

古典の日推進委員会でこんなことをやっています。

一、古典を読み、書き、聞くなど五感を使って古典に親しむ活動を、児童・生徒・学生をはじめ、男女年齢を問わず、すべての市民に広く深く浸透させる。

一、文学・美術・工芸・藝能など幅広く古典を知ることのよろこびを人々の心のうちに広め、やがて「古典の日」を国民共有の日として定着することをめざす。

（「古典の日」推進基本構想）

ということで、古典の推進活動をやっているんですね。私も少しその片棒を担いでいるのですが。

さて、古典とは何かというと、さきほどの条文は、さまざまな要素を織り込んで古典を定義していると思いますが、ひとたび法律になると、演繹的な働きをします。上から降ってくるというか。

では、生命体としての乗り物である古典籍を扱ってきた流通のプロ、古本屋の皆さんは、では DNA としての古典をどう考えてきたかは、私にとって、とても興味があるテーマです。帰納的に、古典を捕まえられるのではないかと、という気がするからです。

千代田区立千代田図書館は、古本屋の目録を膨大に持っています。それは神田の古本屋街を控えているからです。これはもう本当にすごいコレクションでした。つい最近ですが、出納もたいへんなのでしょ、書庫に入れてもらって、ここで1日中、好きなだけ見てくださって言われたのです。宝の山、金銀財宝の洞窟に唯一人、食事なんかしている時間も惜しいので、そこに入り浸って入って次から次へと見るのですけれども、とても1日では見られません。書店別に配列されてあるのです、50音順です。一誠堂のある、あいうえおの「い」の所などはものすごい量で。ドキュメントファイルが全部紙のドキュメントファイルでして、そこに番号が振ってあってそこに目録が入っているのですが。撮影許可も、書庫のスペースで書類に記入して、書庫を出るときに渡す、というものでした。

その古本屋の目録をずっと見ていたら、非常に面白い事例がありました。「は」の棚の所、『阪急古展会』の目録で見つけた記事です。スライドをみてください。縦書きの文章ですが、天地に界線があり、天界には横に「明治・大正の大阪の古本屋」、地界に同じく横書きで「永楽堂主人述」とあります。前文はこうです。「今年は小坂に古書組合ができて四十年目です。それで元、同組合の理事長松本政治さん（七四才）に憶い出のかずかずを話して貰いました」と。「一、和本の大本山鹿田松雲堂／明治・大正の大阪で代表的な古本屋……といえ、矢張り鹿田松雲堂はんでっしやろなあ」以下、一つ書きが四項目あるんですが、最後が面白い。こういうものを見つけると、ついつい寄り道してしまって、少しも調査は進まないのですが。

一、古本より古典は上等ということ

忘れもしまへん鹿田松雲堂はんの軒先に丸型の木看板がぶらり下がり「古典」と書いたありました。朝掛け晩は引っ込めるんですが当家は古本屋やおまへん、古典の店だすねん、古本なら一六夜店＝東区平野一丁目から御雲はんあたり迄、つまり堺筋よりまだ東から御堂筋を越えてなお西の方迄＝でも売ってますさかい……そっちへ行っとくなはれ……という様な事……を言うてるみたいでした。

昭和に入り荒木はんが八幡筋の新店にかけたのも形は縦長ながら「古典 荒木伊兵衛」、現在も大阪の和本商の研究会が「古典会」……。ほんまに言葉って微妙なもんだすな。なんなら阪急古書大会も阪急古典大会と変えはりまっか。呵々。

（『第 34 回阪急古典会もくろく』）

この後は書目の続きで「803 蜂須賀本 西行記 箱入 二五、〇〇〇」がすぐ次の行にあるのですが、それはそれとして。「古典」という看板を掛けている古本屋があったんだということなのです。老舗の古本屋は、そういうものしか置かないということらしいのです。だから、売れるものを扱うのではなくて、自分が「これは古典だ」と思うものを扱っている古本屋さんがあって、それ以外は売りません、と。うちは古本屋ではありませんと宣言している古書店が毅然としてあった、ちょっと矛盾する言い方ですけれども。

それで私自身、「古典」の出前授業に、よく行くのですが。大学の先生に来てもらって、話をしてもらおうという、特別授業みたいなものです。不思議と中学校は一度もありません。小学校と高校です。どちらも今、学会の最先端で研究発表が行われるようなものをそのまま持っていても、まず興味を示さない。というか、通用しないのですね。こんなものに何の価値があるの、こんなことして何の役に立つの、という素朴な疑問です。それは、小学校の先生も恐らくそう思っているのだろうと。「こんなものを小学生に教えるために、あなたは古典の研究してるのか」と言われないうちにも、どういうものを持っていくかというのは、かなり重要なのです。

古典籍を伝える

デジタル時代のアナログの和本を、どう学生に伝えるか。あるいは、子どもたちに伝えていくかという問題は大きいと思います。富士ゼロックス京都から、うちの大学にも出張授業に来ていただいています。その様子を写真に撮らせていただいて、ホームページにアップしたりしてるのですけれども。とにかく、学生が引き込まれるのです。われわれの時は、大体半分か後ろのほうは寝てるのですけれども、この時は寝てる学生、一人もいません。この授業は、図書館情報資源特論といいます。私も一応図書館司書の授業をリレーで持ってまして、そのうちの 2、3 時間を割り当てられてるのですが、そのうち 1 時間は、こういうふうにして現物を見せてもらうのです。複製ですけれども。

もちろん、非常にレベルが高い授業で、学生に分からないものもやっぱりあるのですが。ただし、われわれが聞いても非常に面白い。それから実は私、書誌学で、3 年前だったかな、大阪大学大学院で集中講義をやったことあります。その時にも、ワゴン車で、富士ゼ

ロックス京都の皆さんにたくさんの葛籠つづらを持ってきていただいて、それで昔の貸本屋さんみたいなもので、店を広げてくれたのです。大学院の授業でしたので 10 人ぐらいしかいなかったのですが、それでもみんな目の色を変えて手に取ってました。

われわれ、貴重書を時たま見せる時もあります。手を必ず洗いなさいとか、それからもちろん、陽明文庫や冷泉家時雨亭文庫に伺って重要文化財を扱う時の話なども、もちろん伝えるのです。古典籍を扱う司書には、本の味方になってもらわないといけない。図書館というのは二つ非常に重要な役割がある、と。一つは本の保存、資料の保存です。末永く、その資料を未来に伝えていく。もう一つは、幅広く多くの人に利用してもらう。これは二律背反するのです。多くの人に触ってもらおうと思うと、どうしても傷みます。それから、では保存しようかと思うと、なるべく触らせないほうがいい。制限を設ける、公開しない、ということです。それを学生にまず一番最初に言い、そして皆さんは司書になって古典籍をもし扱う時があったならば、こうしないといけないよ、と。その時に言うのは、ボンドや西洋糊なんかで安易に修理をするな、と。そんなのは人間の傲慢以外の何ものでもない。必ず有機のきちんとした糊があるから、修理など自分でやるなど。専門の人に来てもらって、何年も寝かせた糊でもってちゃんと貼ってもらいなさい、と。それも 100 年 200 年もつらいほうで、その時にはまた次の人が修理をしてくれるので、「未来永劫、私が」という考えを起ささない、ということ必ず伝えます。私は大学で図書館長をしていた時に、西日本の私立大学図書館の研究会の当番校にあたってしまい、各大学の館長や司書さんと話をする機会がありました。和本をボンドで貼ってしまった司書がいる、という大学図書館で現実におこった笑えない話が、実際にあります。

今、大学図書館の現状というのは非常に危機的な状況です。この間、先ほどの「世界の写本、日本の写本」で、アメリカのライブラリアンの方がいらっしゃいました。内容の素晴らしいお話でした。野口契子さんという、プリンストン大学東アジア図書館で司書をやられていらっしゃる方です。大学の図書館が実は古典籍を大学の授業でどのような活用をしたらいいのかという助言をしてる、と。それから、シラバスは全て大学の図書館にリンクが貼られていて、ライブラリアンが図書資料を使って、特に人文系の授業なんかにはかなり積極的にアプローチしてる。ライブラリアンが、どう学生に実際の資料に接して見ってもらうかということ盛んにやってる、という話をされていたのです。その時に、デジタル化についてもかなりの話をしてくれまして、デジタルで比較したほうが実際の本物を見るよりもいいんだという話をしてくださったのです。それは私も、全くその通りだと思います。

人間の目はいかに当てにならないかというのはこれで、冷泉家時雨亭文庫蔵「沙弥蓮愉集」の写真です。『冷泉家時雨亭叢書』第 32 卷『中世私家集 八』の口絵です。私が担当したのですけれども、斜めの合点があり、これが橙色というか黄色というか微妙な色で。朱でもなければ、黄色でもない、一種の山吹色というか。この微妙な色あいの説明ができないので、この部分をぜひカラー写真で、と交渉して、それでこの部分を口絵に出してもらったのです。ところがそれが運命というべきか、製本が済んで送られてきた時に見たら、驚くべきことが分かりました。傍記があることが分かったのですよ。叢書では黄色く写っていますが、この部分です。これは原本では見えません。何回も見たのですが。

それですぐに、朝日新聞社の刊行事務局に電話をして、「申し訳ありません、これ解題

で指摘できなかったので、口絵で出てしまっていますから、次の月報に訂正記事を出させてください。大変失礼しました」と言いましたら、「いや先生、それだけ真剣に見ているということで、かえって叢書の信用度が増しました」と言っていただきました。

そのあと冷泉家時雨亭文庫の調査主任をされている藤本孝一先生と赤瀬信吾先生と、原本をもう1回確認のために見たのです。その時に「いやあ、小林君、こりゃ分かんないわ。これ、誰にも見えないよ」ということになりました。だから、人間の目なんていかに当てにならないか。私はこの一冊を刊行するために10回以上、原本調査に通って、そのたびに目を近づけて見たりするのですね。そうしますと、晴れの日と曇りの日と雨の日で、墨の色と料紙の色は、肉眼で見るかぎり毎回、微妙に違います。

だからデジタル画像のほうがいいという、先ほどの、ライブラリアンのプリンストン大学・東アジア図書館の野口さんの発言はその通りで、本文の校勘をするのであれば、本物よりもデジタルのほうがいいというのは、これはもうしょうがない。濃淡の識別ですので、肉眼は日進月歩で進化している機械には負けるというのは当然で、力の差を如実に感じました。

千代田図書館が所蔵している、一誠堂の目録の中には「店用」という、店で使用されていたそのままの目録もあるのです。いわば、店にとっての根本テキストで、これ、目録にチェックが入ってるのですね。それは冷泉家時雨亭文庫の『私所持蔵書目録』なんかと全く同じで、「これはうちの店に今あるぞ」という在庫管理のチェックを、お店の人は必ずやってるのですよ。それからマニアックな研究者にはたまらないと思いますが、「反町用」と書かれた目録もあります。一誠堂時代の反町茂雄さんが使っていた目録です。それなんか書き込みが非常に面白いですよ。手沢本ですよ。古典籍奔流の時代、その流通の生き証人が、薄暗い書庫で、将来に自分の価値を認めて活用してくれる、「かいひと」を静かに待っているわけです。

そういう目録の中に、一誠堂主人の酒井宇吉の名で、貴重本の複製をやります、という記事があるのですよ。複製事業です。それで、こう書いてあるのですね。頒布いたします、千代田区神田一誠堂、と。一誠堂の店の中に貴重古典籍刊行会というのを作って、それを店主自らが版元になってやるのですよね。昭和30年ぐらいから、これをやりますと。コロタイプなのですが。

奈良屋、杉本家住宅の古文書類の複製を富士ゼロックス京都が手がけました。芸術院会員の杉本秀太郎先生、フランス文学者なのですが、『徒然草』や『方丈記』などの著書もたくさんある、その杉本先生のお宅です。今は公益財団法人になっています。京都女子大学が開いている女性講座（京町屋特別公開講座）は、わざわざ杉本家住宅の町家を借りてやるのです。贅沢ですよ。

私も引っ張り出されて講座で話をしたことがあるのですが、まず財団の方がお話ししてくださいました。その時に、さっきのあの古文書が出てくるのです。それでこれは門外不出で、写真も何もないのですと。まず第一条、一番最初は、どうやって身上をたもつ、伝えていくかということが書かれています。御店を守っていくうえでは体が資本、一番大事で、身体こそが両親からそれぞれ半分ずつもらってできている、お父さん・お母さんの形見はあなた自身なのですよ、大事にしないでどうします、と。それがいわゆる御店の主人としての心得第一条なのです。

この家訓というべき古文書の複製を、富士ゼロックス京都の皆さんが手がけたのです。複製してほしい、と依頼されたということは、写真やデジタル・データではダメな、大事な何か、和紙を綴じた複製物にはある。プリンストン大学の野口さんは、デジタルでは味わえない、伝えられないものがやっぱりあって、それは専門研究者や大学院生にはぜひとも味わってもらわないといけないものです、それは原本を手にとらないと伝えられないものなのだ、ということをおっしゃいました。あれだけデジタルを北米中に張り巡らして、ネットを活用してさまざまな画像とテキストが比較できるよということ、今、中心になってやっている最先端の一流の司書さんが、やっぱりモノでないと満足しないものがあるんだ、と。それなのですよ。それを聞いた時に、ほんものそっくりに再現する、富士ゼロックス京都の皆さんの、あの杉本家に代々伝えられてきた古文書の複製を思ったのですよ。印面だけではなく、肌触り、質感それと大事なものは重量、重さですよ。ああ、やっぱりデジタル画像や写真で「これですよ」と言うんじゃなくて、触感・質感とかがやっぱり大事なのだと、それを考えました。だからこそ、こういう複製はとても大事だろう、と。

順番が前後してしまって申し訳ないのですが、このスライドは富士ゼロックス京都の皆さんが、私どもの大学に来ていただいて、講義をしているところです。古典和歌のカルタもちゃんと複製しています。これをどのように位置付けたらいいのか。恐らく出版の一種だろうと思います。機械を使って作っている。ただし、材料は全て手作り。ところがこの肝心の墨の部分だけは、実は墨ではなくて、コピーですからトナーなのです。特に素晴らしいのは、コピーは等質な紙、コピー用紙を必ず使ってくださいというのが、コピー機メーカーの、コピーを使う上での一番の注意事項だということです。ざらざらしたものや毛羽立ったもの、漉きむらがあったり、厚さにばらつきがあったりだと紙詰まりしてコピー機が壊れますので。それは絶対にやめてくださいというのが富士ゼロックスのコピー機には、書いてあります。それを内部の、この富士ゼロックス京都の文化推進室はやるわけですよ、コピーを絶対したらいけない和紙を、いかに紙詰まりをさせないようにして複写するかということをやっているらしい。

このカルタは、あるフィルターの仕掛けがあって、そのアプリを使うと、この後ろの波打っている、岩に打ち付けているのが、英語になるのです。英語が出てくるのです。さらに絵札が動画で動いて、なおかつ下の海が波打つのです。これは小・中学生にはたまらないだろうなと思って。これを英訳するようになりますよ、と。それから、実際に画像が動くのです。人物もたぶん動くのだらうと思うのですが。それを教室でやってくれるのです。次々と子どもたちが喜ぶようなものをちゃんと用意して、なおかつ次々と出すわけですよ。富士ゼロックスには IT ソリューション部というのがあって、「ドラえもん 四次元ポケット PROJECT」というのをやっています。これは非常に素晴らしいことで、ドラえもんがどうポケットから夢を出すかという、その一つがこれだろうと思うのです。

フィールド・ミュージアム

今、皆さんの手元にあるのは、この「嵯峨嵐山地域の百人一首の魅力を訪ねて」というシンポジウムのチラシです。それから音声観光ガイドのパンフがあります。リーフという

のか。これが富士ゼロックス京都と時雨殿と、それから私ども京都産業大学文化学部・小林一彦ゼミとをむすんで、協働によって産まれました。お金を出してくれた所は文化庁（「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」）なのですが。文化庁がワールドミュージアム構想というのをやろうとしたわけです。美術館博物館だけで完結してしまうのではなく、その建物の内部だけで展示をやるのはもうやめて、訪れた皆さんにそこから出てもらって、その外に広がっている文化、文化財、あるいは雰囲気味わえるような展示はできないかという法外なテーマがありまして。それで知恵を出し合って作ったのがこれなのです。富士ゼロックスのご協力で、音声ガイドですね。スマホを使った音声ガイドをイヤホンで耳から取り入れながら、実際の風景を歩いてもらう。観光ガイドにしてもらおう、と。そのコンテンツをうちのゼミの学生が作るというのです。実際に書物に書かれているものと比べたら、専門のライターに学生では勝ち目はありません。ではどうすれば、ということに、『百人一首』の古典を、彼らなりに受け止め、消化して、発信しようというアクティブ・ラーニングの目論見があるのですが。

音声ガイドサービスというのは、こういう図式になります。観光客がいて、コンテンツの制作者がいて、それでガイドを呼び出す、と。スマホにアプリが入っていると、GPSが位置情報を確認して、半径何メートルという範囲に入ると、音声ガイドが聞こえてくるというものです。3年生のゼミの授業です。古典を見えない文化遺産として捉え、京都の文化を深く学び理解し、観光資源として活用することで地域の振興を図る。観光は21世紀の最大の産業である、と。それでいて、実際に彼らがやることは、案外地道な古典の学習が大部分なのです。デジタル世代の学生ですから、新しいアプリやシステムには飛びついてくるのです、面白そうだな、と。けれども、古典をとことん学ばないと、他人さまに紹介するようなコンテンツなんてできませんので。そのほか、地域や外部団体、企業と協働・連携することで、社会人基礎力育成や就業力を養える。リーフレットの発注も学生が主体的にやります。ライターやデザイナーと打ち合わせを大学の会議室でやるわけですよ。もちろんその過程で、チームで働くにはどうしたらよいかとか、地域社会への還元とか、社会性や公益性も同時に身につけていくことになるわけです。口で言うのは簡単ですが、流行のアクティブ・ラーニングですけれども、これ、とても大変なのですよね。面白そう、でもやっぱり私たちには無理、絶対無理、でもがんばろう、何度も壁に突き当たりながら、ようやくエンジンがかかってくると、ほんとうに学生は、最後は夢中になってやります。

その何年か前に、「お茶と万葉の旅～やましろに恋をしよう～」という観光リーフレットの作成をやりました。古典を学びながら、社会で役立つ実践的な能力を育てようという試みがあって（参考：https://www.kyoto-su.ac.jp/department/fcsi/news/20091225_news.html）、京都府山城振興局とそれから JR 西日本と組んでやったのですが、この観光リーフレットが、これはたいへん評判が良くて、経済産業省から表彰されました（社会人基礎力育成グランプリ 2010 準大賞）。

次の事例は、「スタジオジブリが描く乱世『定家と長明』展」（2012年10月1日～12月16日）です。スタジオジブリが定家と長明のアニメを作成する準備がある、というので、ちょうど2012年の『方丈記』800年の時に下鴨神社とスタジオジブリと私のゼミが連携をして、学生が『方丈記』と鴨長明、それから藤原定家について一生懸命に学び、そして絵コンテ、イメージボードですね、それを400枚、普段は非公開の神服殿という重要

文化財の社殿で展示しました。そこで学生が一人一人、観光客にトーキーのようにしてストーリーを語るのです。ジブリは世界に通用する名前ですので、ESSの子は英語が話せますから、外国人が来た時にはこの子が対応しました。神服殿に原画を貼りまして、それで400枚の解説をするわけです。実際にアニメはできなかったのですが、ストーリーはこうです、定家と長明という人はこういう人でした、と。あるいは『方丈記』はこうで、『明月記』の世界はこうなんです、なんて。これも非常に話題になりまして、MBSのVOICEで放送されたり、京都新聞が夕刊にカラー見開きで特集を組んでくれたりで、非常に頑張ってもらいました。

そういう歴史があって、「嵯峨・嵐山地域の音声観光ガイド」の制作へといくわけです。富士ゼロックスの本社から「SkyDesk Media Trek」の特許を持ってらっしゃる方が、東京からわざわざ来てくださって、ワークショップを夏休みにやってくれました。富士ゼロックス京都の担当者が、とても面倒見がよくて、それでこの写真ですが、これゼミの学生なのですが、非常に生き生きと、話を聞いているのです。それで、大学を使ってまずはこれの理解をしましょうと。グーグルマップを落とし込んでピンを立てさせて、本日の勉強会のゴールは自分でコンテンツを制作、登録できる、自分で現地確認と修正ができる、役割分担と進め方を理解する、コンテンツを企画するうえでの留意事項を理解するというのに、ワークショップにまる1日かけました。

これは学生のノートパソコンの画面ですが、ここが嵐山で、ここが渡月橋で、目標としては、学生たちがここにピンを立てるわけです。先ほどのワークショップでは、大学の構内に取りあえずピンを立てると。それで一文でもいいから、10字ぐらい何かメッセージを書けと。実際、動くかどうかやってみようかということをするわけです。学生は喜々としてやっています。学生が、「ここは菖蒲池です」というピンを立てた。大学構内には『伊勢物語』の世界を模した庭園があるんですが、八つ橋が組まれていて。ところが全然、音声が鳴らない、反応しないのです。「壊れてるとの違いですか」と学生が質問すると、違うよ、と。「必ず最初はみんな真ん中にピンを立てる。池の真ん中だとかだと、ずぶずぶ池の中に入っていけないと誰も聞けない。半径20メートルで作動するようになってるから、例えば金閣寺の説明するときに、金閣の鳳凰の一番上にピンを立てちゃうと誰も聞けない。だから、まず駐車場あたりから鳴らさないと駄目なんだ」と言うのですね。

そういう学習をさせて、あとは現地調査です。嵯峨・嵐山地域で『百人一首』というのが核ですから、なぜ時雨殿なのか、定家の山荘・時雨亭や為家のことなど、一通り学習してからフィールドワークに行くわけです。年にわずかししか開けないお堂も、コンタクトを取って自治会の人たちがきちんと開けてくれるのですが、「定家さんが大事にしていた仏さんで、為家さんの念持仏です。これは滅多に開けないのです」なんて言うので、学生がしっかりとメモを取ります。裏は自治会の集会所で、座布団を出していただいて長老の話を聞く。そこで、コンテンツに生かそうとしてるわけです（参考：京都産業大学 HP「文化学部「日本文化演習」小林一彦ゼミ 嵯峨野・嵐山フィールドワーク」<https://www.kyoto-su.ac.jp/campusflash/2425.html>）。これはやっぱり古典の学習で、恐らく、中高生ぐらいまではこれでいけると思うのです。地元の児童生徒が、学生が興味を持って勉強しにくる、というので、地域の人たちは手弁当で協力してくれるのですね。儲けようとか商売に使おうとか、写真だけ撮られて利用だけされて荒らされて、しかも誤りを書か

れて、そういった商業取材には皆さん辟易していますので。

このスライドは、JR 東海のポスターにもなった、常寂光寺の有名な多宝塔です。ポスターは脚立を持ち込んで、もっと上から撮ったので、京都の街の様子がもっときれいに撮れているのですが。それで、「この多宝塔は京都の中でも特に美しいといわれ、見る角度によって印象を変えます。どっしりと構える寺院の建物と比べると軽やかで、周りになじむように作られているのが特徴です。ここから少し上がると、藤原定家と家隆を祭る祠ほこらがあります。そのそばには定家が百人一首を選んだ場所だと伝えられている時雨亭跡があります」ということを、一応これだけのスペースで音声ガイドで学生がやるわけですね。長いと聞いてくれませんか、分量が限られている中で、何を伝えるか。仕上げの段階での「減量」が一番つらい、と学生は言っていました。

これが完成品なのですが。これを載せるためにどれだけ学生に駄目出しを出し、研究させたか。膨大な資料を図書館などに行って調べ、現地に行くわけです。何しろ、歩きながら、古典をチームで解説するという音声ガイドですから。「君らは学者ではないんだから、君らの印象でもって一般の人が分かりやすいような文章を君らが発信しろ」と言うと、自分の感想、個人の感想なんかも入れるわけですよ。これが学習なのです。そうでないと今の学生は、コピーを簡単にやりますから。それでは面白くないのです。こんなの全然だめだ、学者の書いていることなんか当てにならないよ、君らの目を信じなさい、君らの手触りを信じなさい、と。

このスライドは、新聞の夕刊です。私の授業風景が写真で出ています。「自ら問う力、磨け 大学教育ソフト面も変化」という見出しで、特集してくれました。「大学教育は近年、施設だけでなく講義の内容や評価法などソフト面でも大きく変わりつつある。一方的な講義から、学生に自ら課題を見つけさせようとする手法への転換は、社会が求める大学の役割の変化とも大きく関わっている」。それで、私に取材が来ました。

「荒れていた小倉山を復興したのは冷泉家。音声案内に解説を入れた方がいいね」。京都産業大（京都市北区）の会議室で 11 日、15 人の学生たちがパソコンに文章を入力しながら意見を交わした。

学生たちが取り組んでいるのは、京都の嵯峨・嵐山地域の観光名所を紹介する音声ガイドの作成だ。文化庁の助成事業で、企業などと協働で開発を進めている。一帯の寺社仏閣を取材し、観光客に各地の由来や歴史を分かりやすく伝えるナレーションを練る。

学生が自ら考えながら具大抵な課題に取り組む授業は「課題解決型学習（PBL）」といわれる。指導する小林一彦・日本文化研究所教授は「授業を通し、学生が社会人としての基礎能力や責任感を身につけられる」と指摘する。

（京都新聞 2014.11.22 夕刊）

時雨殿が勸進元でしたので、地元のそれぞれの自治会とか寺院に話をつけてくれて。ご住職や自治会長が出てきて、とっておきの情報をくれるのです。それを学生は喜んで聞き取りに行くわけです。音声ガイドの文章をパソコンに入力した後は、自分で鳴らしに行くので、6 時ぐらいから活動しています。観光客が来てしまうと活動にならないのですよ。だ

から 6 時ぐらいから行って、音声を鳴らしながら、「駄目だ、ここは 5 メートル早い」とか、夢中になって彼らはやって、そのあと嵯峨から大学まで戻ってきて 1 限の授業を受けるという子たちが出てくるのですね。そうしますと、この授業をやることによって学生が生き生きとしていますから、何か感化されてさらには彼らの周りも活性化してきて、なおかつ学ぼうという雰囲気や伝播していくわけです。それはとても重要なことだと思うのです。古典を教える、実学から最も遠いと思われる古典を学ぶことで、実学教育が、アクティブ・ラーニングができるという一つのかたちが、見えてきたように思いました。

それでは音声ガイドは実際どうなっているかということ、このスライドを見てください。

- ・サイ町の「弟子、「円仁」が
- ・天[^]龍次の近くに位置することから[^]、天龍寺の生江をもらい、竜悶バシになりました。
- ・欧妊野乱で失われましたが、
- ・少しススムと、コゴ[^]図かがあります。
- ・婚二値まで伝わる」百人一首が
- ・ippo、また[^]ippo と/歩く[^]goto に[^]豊かな
- ・吐月狂」の下」を流れる・この川は・大堰川です
- ・その先二羽、たきぐちでらと祇王寺が
- ・磁器試案が見えてきます。
- ・右側は、「亭課狂の塚；遙拝除」です。

一見すると誤字・誤変換のオン・パレードのように見えますが。音声ガイドの打ち込みは学生たちがこうやってるのです。これは、技術を作った富士ゼロックスの担当者でも気がつかなかった、と関係者が感動していました。なるほど、こうするのかと。これは SAYAKA という名前のソフトなのです。アニメ声や男性の声、音声にはいろいろなパターンがありますが、SAYAKA というのは女性のデジタル音声です。人工知能は優秀で、漢字もローマ字も読み取ります。けれども、われわれ生身の人間の話し方、アナログの音声はやはり微妙にその時々で発音が違うのですよ。語順や単語の並びでイントネーションも変化しますし。話芸では「間」も、大事です。夢中になると、学生たちはものすごく凝りますので、少しでも生きた人間のイントネーションに合うような入力法はないだろうか、と考え抜くわけです。そうしますと、かぎ括弧を入れると思わぬ「間」が生じると。読点、句読点はちゃんとプログラミングされているけれども、そうでない読めないものを入れておくと人工知能が、どうも一瞬、戸惑うらしいのですね。それによって、一步、また一步と歩くごとに、非常になめらかな音声ガイドができるというのです。普通は「忘れ物がないように、皆さん、何とかしてください」とかというのが音声ガイドです。バスも、「次の何とかは何々口」とか、それを自動的に読み込ませて音声でやってますが、今かなり優秀になりましたが。それでもなめらかに読めてないですね。それを学生たちが、かなり工夫してやります。

だから、たとえば楠木正行ですが、正行は四條畷の戦いで、と打ち込むと四條畷を「シジョウ／ナハテ」と機械が認識して、イントネーションが京都の四條になってしまう。これだと、四條畷と聞こえないのです。文字だったらいいのですが、音声です。それを、夜になっても、終バスぐらいまで夢中でやってるのです。何度も誤変換を打ち込んで、機

械に読ませ、「摩擦らは試乗 nawate の戦いで」という台本を作ってくるようになります。吐月狂」の下」を流れる・この川は・大堰川です、などは流暢な日本語になって聞こえてきます。

音声 completes と、次はリーフレットです。このスライドは初稿段階での業者との打ち合わせの風景です。学生は夢中で自分たちの知識を語り、それを反映させようとしています。どうしようかと。『百人一首』の断片的な知識しかないような、時雨亭が何か、宇都宮蓮生が誰なのか、知らなかった学生なのですが。それで完成のときに、時雨殿の大広間でパネルディスカッションをやって、その後に聴衆の皆さんと音声ガイド体験ツアーのお披露目をしたのです。実はそうしたご縁があって、文化推進室との間が繋がりました。古典の複製を専門的にやっている社員がうちの会社にいますけど、会ってみますか、と。

シンポジウム取材に来てくれた記者が、後日、実際に音声ガイドを使って散策した記事を書いてくれました。はたして実際に使えるかどうかというのを検証したのですね。ところが非常によくできてるというので、記事ではお褒めをいただきました。それが、これです。もともとの原稿は、さっき説明したとおりで、もうぐちゃぐちゃなもので、記号が挟まっていたり、アルファベットが入ったり、とか。

「後ろを振り返ってはいけません」。13 歳になった子どもたちは、この辺りでそう言われてきました。それは十三参りで、法輪寺を訪れて帰る際に渡月橋で後ろを振り返ると、授かった知恵が取られるという言い伝えがあるからです。

つまり GPS というのは動きが感知できます。だから「右手に見えますのは」ということが可能なのです。こちらからこちらに向かって歩いてるな、という場合には、右手に見えるのは何かです、と。この音声は、ちょうど法輪寺から渡月橋を渡ってくる人にしか聞こえてこない、反応しないのです。そこでいきなり「後ろを振り返ってはいけません」って耳元で言われると、おおっ、と思ってしまうところがミソなのですが。「さすがやわ」と。これこそが移動しながらの音声ガイドだ、って褒められたのですね。京都の子どもたちはみんなそう言われてきたんや、という説明も入ってて、しかも飽きさせない。長いと飽きられて音声を切られちゃうというのですね。「長いと音声ガイドは使えませんよ、階層化してください」と、富士ゼロックスの担当者に言われました。次の説明が聞きたい方はボタンを押してください。するともっと詳しい説明が聞ける。あるいは次の学生にリレーのようにつないで、別の学生が引き取って、またうまくコンテンツを提供する。渡月橋を渡り終えたときにどういうものができるかとか。かなり考えて、地域全体の古典のフィールドを結ぼうと考えるわけです。

出張授業

「デジタル世代に和本のアナログ文化を伝える」というのが、本日のテーマですが。さきほど、いろんな所に呼ばれて行くと言いました。小学校の出前授業、あるいは中学校、あるいは高校。小学校にも、呼ばれて授業に行きます。京都には「ようこそアーティスト文化芸術特別授業」というのがありますが。「講師が小学校を訪れ、次の時代を背負っ

て立つ小学生に、それぞれの道で取り組んできたことをわかりやすく伝える出前授業を実施する」という取りくみです。それで、ある小学校にうかがう前の、先生との打ち合わせで「このあいだは、茂山千作先生が来て下さって、狂言をやってくださいました。日本人の古典というものはこういうものだよということで。うちの学校には狂言研究会というのがあって、壬生寺も近いし、狂言をやってるクラブもあります」と、そういう世界が京都なのですね。その翌週が私なものですから、何を話そうか、と。デジタル世代ですので、画像をたくさん見せるわけです。YouTubeも見せます。それで、古典とはどういうものか、というような話をするわけです。

事前に、何か準備するものありますか、と訊かれたので、じゃあ必ずクレヨンと画用紙持って来てください、とお願いします。その時は体操のお兄さんです。「みんな元気？ こんにちは。ん？ ちょっと元気が足りないみたいだね」って言って始めるわけです。みんな画用紙持ってる？ じゃあ、まず地平線を描いてみようって言うと、1本書いてくれるわけです。「上に描いてくれた人はプライドの高い子やで」とか冗談言ったりして。それで、「自動車描きましょう」「太陽描きましょう」と言うのですね。「進行方向が分かるように、排ガスを出してください」と言うと、「先生、うちの車、電気自動車なので、排ガス出ません」と。「いいよ、いいよ。それは高級だ。じゃあ進行方向、矢印で描こうな」とか。それから「太陽に顔描いてもいいですか」「いいよ、いいよ、もういくらでも描いてくれ」と。そして、「太陽に色塗ってくれ」と言うわけです。

そのあと机間指導して歩きます。地平線、車、太陽が出てきます。その時にほとんどの子は、太陽は赤で描くのです。それじゃあということで、絵本を見せます。「みんなが小さいころ親しんだ絵本を見てもらうよ」と言って、『はらぺこあおむし』とか、あるいは『よかったねネッドくん』とか。そうすると、外国の本では、みんな太陽は黄色なのです。「それじゃあ日本の絵本も見てみようか」と言って、谷川俊太郎の『これはおひさま』という本があって、それは赤いものばかり集めています。梅干し弁当とかいろいろ出てくるのです。「これはおひさま？」「梅干しだよ」とかいう、そういう本です。そうしますと、みんな太陽を何色で描いた？ って訊くと、「赤」と言う。

「ちょっと、みんな、窓際のほうに集まれ、太陽見てみい。あれ何色に見える？ 真っ赤っか？」って言ったら、「真っ赤ではない」「まぶしい」とかいろいろ言うのですが、赤ではないのです。その時に、「おかしいかな」と思うのですね。

「それじゃ天気予報見てみようか」と言って、天気予報のスライドを全部出します。1カ月の天気予報と言って。そうすると、雨とか曇りのマークは、テレビや新聞、会社によってまちまちです。グレーの雲描いたり、あるいは黒い雲描いたり。あるいは曇りはピューーというような動きのある雲を描いたり。雨もカエルが出てきたり、雨が降ってる絵とか、こうもり傘のマークとか、新聞社とかによってまちまちなのですね。ところが晴れだけは、真っ赤なお日さまなのです。黄色いお日さまは一つもありません。「みんな、これ天気予報やろ。みんなも太陽を赤で描いたな。なんで赤で描くんやろうな」というところにいくわけです。

「それは日本人は日本の文化で昼間の太陽は見なかったのと違うかな」と言う。「みんな初日の出、見たか？」「見た」とか。「夕焼け空きれいやな」と言って、「昔の歌人、歌をつくって詠んでいた人たちは、朝に太陽が出てくるとか、あるいはお日さま沈むとか、

そんな歌ばかりなんやで」ということを言うわけです。「なごの海の霞の間より眺むれば入る日を洗ふ沖つ白波」(『新古今集』春上 35 藤原実定) という歌があります。あれは、どこにも赤と描いてないのですけれども、赤と白のコントラストが非常に効いた歌です。赤い夕日を白い波が洗ってるようだという。だから赤と書かなくても、太陽は赤なのです。

それはタブーだったからです。宗教とかそういうものと関係してるわけで、だから必ずみんな初日の出のときに拝むやろうと。今年はいいい年になりますようにお願いします。なのでお日さまを拝むんやと言う。やっぱり太陽は信仰の対象になってるからで、昼間の太陽を見ることはタブーだったんだ、日本人は太陽を朝と夕方しか見ないんだよ。だから「夕焼け小焼け」の歌や、朝の歌が多いんだよ、という話もするわけです。

それから YouTube を見せるのです。北島康介の水泳。むちゃくちゃ盛り上がるのですよね、それで「北島康介はオリンピック、何回出てる？」と質問して。シドニーから出ているのですが、すべて動画が残っています。それを子どもたちに見せます。

その後、「みんなの自動車はどうやった」と見せるのです。確認すると、ほとんどの子は、排ガスを右に出して、自動車を描きますね。車は左へ行くようになっています。右側に排ガスが出ているのです。つまり自動車は、右から来て左に進んでいく、というふうに描くのです。「みんなそう描いたな。よーし。それじゃ自動車、この自動車何かな」と、レクサスとかをパンフレットで出すわけです。そうするとほとんどの自動車は、日本のカタログは全部、左が前で、右側が後ろなのです。全部、一様にそうなのです。じゃあ、外国の車見てみようかって。これはベンツ、BMW、ボルボとかと見せると、外国の車は左が後ろで、右が前なのです。「これ、ひっくり返して裏焼きしてないよ。文字が反対になってないでしょう。みんなの絵、どう？」って言うと、一人か二人ぐらい逆に描く子がいるのですね。「あんたんちの車何？」って言うと、たまたま外車だったりすることがあるので、「高級車やな」とか言ったりするのですが。

つまり文字が、日本の文字は“右から左”。ちょうど丹後で、『百人一首』の時に小学生・中学生の大会で講演してくれと言われたときに用意した、色紙なのですが。これを大きくしてスライドにしました。「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」(『百人一首』小式部内侍) の歌は、丹後の子たちはみんな知ってますので、“右から左”に書かれているね、ということを行います。それで、日本人の目の動きというのは実は“右から左”なんだよという話をするのです。

それでこの写真(注：清流を模した塩の上に鮎が置かれた写真)も大きくして映す。「魚の頭が必ず左だよね。お母さんに、ちょっと皿の向きが違うよって怒られた子いない？」とか。日本人は、“右から左”の目の動きなのです。日本人は“右から左”という文化で慣れ親しんでいるので、それで「これがいかにもほら、鮎が動いてるようやろ。これ、鮎が清流を登っていくようやろ。これ、塩やで」と言って、「うわすごい。おいしそうや」と答えると、これが実は「見立て」という、『古今和歌集』の一番だいな美意識なんだということを教えるわけですね。小学校の出勤授業でも、ここまではいきます。

それで先ほどの事例でいくと、外国の車は全部反対なのですね。日本の絵巻も出して、馬が走ってる様子や、時系列、すべてが“右から左”やろ、と言う。

以前、もうかなり前ですが、国文学研究資料館が戸越から立川に移転する頃のことです。松野陽一先生が「立川に移転したら、展示室も作るんだよ。ところがわれわれの常識がな

かなか通じない。展示室というと、ごく普通の展示ルームにしてしまう、それでそんなことをしたら絶対駄目だ。日本の絵巻を広げて、逆向きに歩かれちゃったらとんでもないことになるので、必ず入り口から順路が右から左に流れるように展示室を作ってくれ、ということをお願いしないと分からない」なんてぼやいていらしたことを思い出しました。

それで先ほどの北島康介の YouTube を、もう 1 回出すのですね。北島康介の水泳の時の画像はシドニーも、それからアテネもロンドンも、みんな、北島康介は左側から泳いでるのですよ。左側から泳いで、右にタッチしているのです。陸上だとカール・ルイスでもボルトでも、左から右に走りますよね。それは、スタジアムの作りがそうだから仕方がない。だけど水泳は、左側にも右側にもスタンドがあるので、どちらの側にカメラを構えるかは自由、向こう正面で撮っても問題ないわけですよ。

でも、北京だけは、北島康介は、右から泳いでくるのです。それは書物の力なのです。みんなが自動車描いたのも、それから車のカタログも。「車のカタログは本やろ。日本の本はそうなるんやで。みんな、国語のテキスト出してみい」と言って国語の教科書を出すと、「あっ、ほんまや。こういうふうにしていく」と言う。「算数はどうや、算数は横書きやろ、反対やろ」と。理科はどうや、とか。それから社会も最近横書きなので、国語だけなのでよね。国語は“右から左”やろと。「だから、日本人の目の動きや考え方や、無意識のうちにみんなが車を描いたりするのも、それは古典の力やろ」と言いました。日本人は『源氏物語』も『古今和歌集』も、それからさっきの小式部内侍の歌も見せたね、ということで、「みんな無意識のうちに“右から左”という目の動きで、物事を観察しようとしているんだよね。中国も同じなんだよ」と。書物のルーツは中国なので。北京オリンピックのカメラマン、北京の中央電視台のスタッフは、やっぱり北島康介は左に向かって泳いでこないと気が済まなかったのでしょうか。あれは本当に面白い事例です。

一応そんなかたちで出前授業をやっているのです。そういう事例が、小学校から中学校、高校、大学ぐらいまで通用します。大学になるともう少し古典の和歌を出したりはしますが。夕陽の歌など、あるいは朝陽の歌ですね。

結びに

やっぱりこれから IT の時代が進んでくると、人工知能が代行するような仕事はいっぱいあるだろうと思うのです。古筆切でこれとこれはツレだというのは、恐らくもうコンピューターに勝てないでしょう。ばーっとデジタル資料を拾ってきて、それで同じようなものはすぐ同定してくれるだろうと思います。ただし、やっぱり問題がありまして、大きさが分からない。

大学図書館でどういう人が今、司書をやってるかということ、ほとんど外注です。大手の書店や、あるいは人材派遣会社が、受付から出納、すべてセットで販売してくるのです。見積もりを取って安いほうを経理や理事会は採用しますから、質の問題ではなくて。こっちのほうのコストが安いよと。パッケージで、受付から本の出納から全てコストが安いところが大学図書館に入ってくるわけです。どこの大学図書館もそうでしょう。

それでもごく一部の部署では、専門的な技量が必要になります。それで一番重宝がられるのは目録の取れる人で、本が入って来たときにこの本はどういう本だと、すぐに分類で

きる、そういう管理や情報サービスができるというのは、図書館員として一流なので、目録が取れるかどうかは、とても重要なのです。

それでこの間「世界の写本、日本の写本」というシンポジウムがあったというお話をしました。あの時、質問が研究者から出たのですが、一番最初のもは、「UCB 三井文庫は版本と写本とを分けてまず山を作ったんだけど、普通そういう分類の仕方は日本ではしない」という質問でした。けれど、それは研究者の考え方です。私はもう、ボンドで貼られちゃったりとか、「こんなことするの」という事例を、大学図書館の関係者から聞いたりしてましたから。やはり受け入れ係としては、本が入って来た時の受け入れは、まず目録を作らないといけないのです。最初の大分類があるのですね。その時にコピペができるかできないかは非常に大きな問題なのです。それで版本と写本とに分けるはずなのです。版本はどこかに入れてますので。そこの図書館のデータをそのまま落とし込めば、目録がすぐにできるのです。ところが写本はそれ1個しかないから、目録を作るのはすごく骨が折れます。

ある研究者が、有名な美術館と、ある大学図書館と、同じ名前の絵巻があって、写真で見ると絵柄も同じ、目録で検索してみたら寸法までそっくり同じ、これは謄写本か臨写本か臨摸本か、とにかく親子関係の写しだろうと考えて、それぞれを原本調査した。ところが、寸法を測ってみたら全然違う。実は、大学図書館にその絵巻が入ってきた時に、同じ名前のものがどこかにないか、あちこちの目録を調べていたら、有名な美術館が同じ題名の絵巻を所蔵していたので、それをコピペして目録を作ったというのです。寸法くらいはせめて自分たちで測ってくれないと。寸法までコピペしちゃってるのですね。それが大学図書館の実態なのです。

さっき古典の話をしましたけれども、われわれは古典を大事にしているか、われわれは古典というものと接しているか。小学校から、あるいは大学まで、古典の読み物としての本を、古典籍というものを使って、一番本当に勉強してもらいたいのは文化とか DNA とか、です。日本語というものは日常会話だけでない、もう一つ非常に重要な役割があって、それは芸術作品の、いわば遺伝子を伝えるための非常に重要な役割をしてるわけです。『源氏物語』にしても『古今和歌集』にしても。それらは日本語なので、その乗り物が本なわけです。今、本屋にある『源氏物語』やあるいは絵本の『かちかち山』にしても、ルーツはもちろんずっと昔にあるわけで、形態が違い肉体は違っても、やはり DNA の部分はとても大事です。そこをどう国語教育の中に落とし込んでいくかということとはとても大事だし、むしろこれからやらなければいけないことだろうと思うのです。

文科省が、そういうことを認識してくれていけばいいのですけれども、アクティブ・ラーニングという言葉が入ってくると、みんなに iPad 持たせて、先生方にこれでやれとか、電子黒板を導入する。それはたぶん予算の問題で、文科省の予算が減ると発言力がなくなるということもあるのかもしれないのですが、予算が取れますよね、電子黒板導入すれば。東京辺りはいいとしても、「みんなトンボが飛ぶようすを見てみようか」とか「トンボの羽が何枚あるかな」と電子黒板で見せるよりは、田舎の学校だと、ちょっと田んぼなんかに行って「これがトンボだ」って捕まえたほうがはるかにいいだろうと思うのです。

だから、デジタル時代の、いわゆるデータを共有できる時代の教育と、それから、“そのもの” ですよ、そういうものとかがあって。しかも杉本さんが満足しなかった、デジ

タルコピーや、あるいは画像では満足しなかった家訓のああいう本を、富士ゼロックス京都の皆さんが作ってくれたもので満足したというのは、何かあるだろうと思うのです。そういうものの力というものも、子どもたちにはしっかりと教えていかなければならない。そのためには、一つのモデルケースとして、富士ゼロックス京都の社会貢献の素晴らしさは、もっと注目されていいだろうと思うのです。

一応、私のほうからの話は、はこれぐらいなのですからけれども。

ここに中山家の『源氏物語』があります。さきほど、突然お願いして資料館の所蔵本を出していただきました。これを日本古典文学学会が複製した時のことを、池田利夫先生が「日本古典文学学会との三十余年」（『日本古典文学学会々報』別冊（終刊号）、財団法人日本古典文学学会、2006.12）という回想録で書いています。「はじめて松田と会ったのは、つまりは日本古典文学学会を立ちあげる打ち合わせ」をしたのは、ということが書いてあって。事務局長だった松田稔さんと池田利夫先生、もうお二方ともお亡くなりになりましたけど。

調査や典籍の撮影、製作の現場には、いつも必ず松田がいた。福井県武生での紙漉きなど、私は立ち会うと言っても何も知らず、見聞きするすべてが新鮮だったが、松田はかねて体験済みだったらしく、滅法詳しくて、漉きあがった紙をためつすがめつしてはダメ出しするのに感心した。印刷でもそうだった。ある日松田が研究室に来て、見せたいものがあると言う。「中山さんから末摘花を借りてきてしまいました」と包みを差し出すので、そんな筈あるまいと開けてびっくり、そこに確かにあったのだ、と思ったのも束の間、取り上げると、一帖綴じさせた試し刷りであった。一緒に京都まで出向いて繰り返し色校正をした成果か、本物と見紛うばかりの表紙なので、改めて二人して手を取り合わんばかりに喜んだのが、ついこの間のようなことなのだ。

と書いてあるのですね。その「末摘花」の表紙が本当にいい表紙なのです。日本古典文学学会が総力を挙げて作ったあの表紙の複製、和紙で漉いてコロタイプがあつて。

ただし、こうした手の込んだ複製本は、総じて高い。田中親美の複製などは、古本屋などでもとても高価です。図書館では、貴重書になっているところもあります。容易に触れないから、その点では、やはり扱いが原本と同じになってしまう。

富士ゼロックス京都の皆さんの複製本のいいところは、出前授業などでたくさん子どもたちが触ってるのです。それは折り皺だったり、めくりの手擦れだったり、というものが、そのたびに加わって、よりリアルに再現されているというか。だから、より本物に近いですね。ガラスケースの中にしまわれていない、呼吸して、息をして生きている。

だから今、今西（祐一郎）館長の本が下のロビーに出てますけど、あれもぜひ、富士ゼロックス京都の協力で複製を作っていただいて、子どもたちにもっと自由に触ってもらいたらいだろうな、と思います。